

記憶と記録のあいだ

——中国「新方志」における戦争と図書——

金丸裕一

目次

1. はじめに
 2. 最近の新成果
 3. 「新方志」に描かれた戦時中国の図書
 4. むすびにかえて
- 附 引用「新方志」一覧表

1. はじめに

昭和時代前期、とりわけ日中全面戦争の期間において、日本の中国侵略に起因した中国側被害が膨大であった事実については、すでに多くの史料・論著によって指摘される通りである。図書をはじめとする文化財の場合も、戦禍による焼失や破壊、さらに各種掠奪など、全体像のみならず個々の事例に関する記録も多く、また同時代史的な出来事として、被害と加害の両面からこれを記憶している人々が、ついこのあいだまで、歴史の証言者として重要な役割をはたしていた。

敗戦から60年が経過した現在、戦争の問題をめぐる語り部の多くは、研究者を含めてほぼ、戦後世代によって交代されつつある。広島や長崎の、そして南京や重慶の、さらに真珠湾やアウシュビッツの口伝者たちが、自然の摂理にしたがって、この世から永別しつつある現実には、確かに重く悲しい。戦争の抛棄という戦後日本の理念ですら、あっけなく解消されんとする21世紀初頭、否応なしの世代交代は、これからの世論形成に対して極めて深刻な影響を及ぼすであろう。われわれ歴史家には、これを阻止する力量があるのだろうか？ クールな「観察者」に徹する態度には、歴史創造の主体者としての、そして国家の主権者としての自負が確認されるのだろうか？

しかしながら、歴史学研究という視座より「いま」をみつめたとき、そこに発見できる変化は、必ずしも負の作用だけではないと思う。ここで誤解を恐れずにいうならば、いまこそ昭和前期の歴史は、同時代史研究にとって避けがたかった、記憶や感情による拘束・呪縛から、徐々に解放されつつあるのである。無論、それぞれの国家・民族にとって、各々の社会に刻まれた記憶や感情の深さは異なり、故にそこからの訣別が、必ずしも同じ歩調で進むものであるとは考えていない。だが、あたかも明治維新や阿片戦争の語り部たちがこの世に存在しなくなったあとの研究の進捗と同じく、文献史料による実証という史学本来の在り方へと回帰していくことは、「戦争史」研究とて例外ではないだろう。

このような問題意識に基づいて、筆者はこれまで、「戦争と図書」あるいは「戦争と情報」をめぐる問題について、いくつかの拙い論文を世に問うてきた。いま、その一覧を紹介すると、次の通りである。

* *

- (a) 「中支建設資料整備委員会とその周辺——『支那事变』期日本の対中国調査活動をめぐる習作」(『立命館経済学』第49巻第5号, 立命館大学経済学会) 2000年。
- (b) 「戦時日方略奪図書問題述評」(辛亥革命九十週年国際学術討論会論文, 台北) 2001年。
- (c) 「曲論の系譜——南京事件期における図書掠奪問題の検証」(『立命館言語文化研究』第14巻第2号, 立命館大学国際言語文化研究所) 2002年。
- (d) 「近現代史研究と『語義』の変遷について——『特務』概念をめぐる日中間の相剋」(『ポリグロシア』第6巻, 立命館アジア太平洋大学言語教育センター) 2002年。
- (e) 「支那科充実後援会寄贈中国語図書『掠奪疑惑』の探究」(『彦根論叢』第344・345号, 滋賀大学経済学会) 2003年。
- (f) 'Distorting History, Constructing Histories: The Post-war Debate on the Fate of Chinese Texts in Occupied Nanjing', "Ritsumeikan Journal of Asia Pacific Studies" No. 13, 2004.
- (g) 「戦時江南図書『掠奪説』誕生の歴史的背景」(『歴史学研究』第790号, 歴史学研究会) 2004年。
- (h) 「『南京図書大略奪』のまぼろし」(『諸君!』第37巻第8号, 文藝春秋) 2005年。

* *

一連の作業は、史料の発掘・蒐集・分析と執筆を、ほぼ並行しながら進めていたために、内容には重複した部分も多い。その後も、引き続いて新しい素材を入手しつつあるとはいえ、目下その論旨に修正を加える必要は見いだしていない¹⁾。しかし、1980年代後半以降、中華人民共和国各地において公刊されている「新方志」について、筆者はこれまで本格的に分析したことがなかった。このシリーズは、日本における県史、乃至は市町村史に該当する存在であり、地を這うが如き作業を通じて、暮らしに密着した歴史の掘り起こしを体現したものも多くある。その編纂に参加した関係者の中には、歴史を実体験した人々も数多く含まれ、いわば地域の「記録」と「記憶」の集大成ともいべき二次史料と呼べるだろう²⁾。

したがって本稿では、主に日中戦争時期の上海市・江蘇省を対象に、これら「新方志」に書かれた内容を、初歩的に紹介・検討していきたいと考えている。大方のご批判・ご叱正を期待したい。

2. 最近の新成果

前出の論文において再三再四強調した、わたくしの中国側研究に対する批判は、次に要約できるだろう。すなわち従来の研究の多くは、日中全面戦争開戦直後の上海・南京を中心に、日本軍が主導した100万冊近い図書の計画的「掠奪」が実施されたのみならず、これらが日本国内へと「持ち去られ」、侵略戦争遂行のために全国各地の図書館で活用されたと主張する。しかしこの学

表1 「掠奪」をめぐる研究史

文献	記述	「略奪」時の状況				「略奪」後の帰趨
		作業員	兵隊	苦力	トラック	
	『業務概況』1941年	接收員のべ330人	のべ367人	のべ830人	のべ310台	南京・上海・杭州で整理・保管した。
	『赤旗』1986年	特務員のべ330人	のべ367人	830人	のべ310台	「価値の高いもの、有用なものは日本に運びこんでいました。」(山崎元談)
①	『参考消息』1986年	特工人員330人	367人	830人	のべ310台	記述なし。
②	趙燕群 1987年	特工人員と兵士合わせて700人近く		800人以上	のべ310台	1ヵ月の時間を費やし、日本に持ち去る。
③	邱富生 1988年	日本「専門家」330人	367人	830人	のべ310台	整理した後、中支建設資料整備事務所が翻訳。
④	嚴紹澗 1992年	特工專業人員330人	367人	830人		中国全体で274万2108冊が日本に持ち去られた。
⑤	農・関 1994年	特工人員7000人		800人	810台	珍本・善本を日本に持ち去る。
⑥	孟・喻 1995年	特工人員330人	367人	830人	のべ310台	記述なし。
⑦	孟国祥 1997年	特工人員230人	367人	830人	のべ310台	記述なし。
⑧	趙建民 1997年	特工人員7000人		200人	810台	日本が中国で略奪した図書は、帝国図書館・東京帝大図書館・同史料編纂所・慶應義塾大学図書館・早稲田大学図書館・日比谷図書館・東洋文庫・東洋文化学院・大橋図書館に所蔵。
⑨	孫宅巍 1997年	特工人員330人	367人	830人	のべ310台	1938年6月末から9月初にかけて、満鉄・東亜同文書院・上海自然科学研究所の専門家が整理した。
⑩	李彭元 1997年	接收人員が数名	支援		軍が支援	85万冊あまりが日本側の手中に入る。
⑪	劉志恕 1998年	1938年1月22日に9人を上海から南京に派遣して、70ヵ所あまりで調査・収集した。				25人の専門家で整理・分類したあと日本へ搬び去る。
⑫	趙建民 1999年		367人	2830人	310台	東亜研究所・東洋文化研究所・東亜経済研究所・東亜風土病研究所・大東亜図書館・民族研究所で、南京などで略奪した図書88万冊が役割をはたした。
⑬	趙建民 1999年	占領地区図書文献接收委員会	367人	2830人	310台	同上
⑭	李雪梅 1999年	「文化掃蕩」により88万冊の本が略奪された。				中国全体で274万2108冊が日本に持ち去られた。
⑮	李彭元 1999年	日本「専門家」330人	367人	830人	310台	重要なものは翻訳し、また1941年に汪精衛政権に返還。
⑯	来新夏 2000年	日本のいわゆる「科学調査団」が中国各地で図書資料を略奪した。				南京の70万冊、香港馮平山図書館の3.5万冊、水瀾閣四庫全書などが日本に持ち去られる。
⑰	傅・謝 2001年	日本側の人員330人	367人	830人	のべ310台	図書整理委員会の専門家が整理し、その後も中支文化関係処理委員会がこれを継続。
⑱	趙建民 2001年		367人	2830人	310台	どれだけが日本に持ち去られたのか、現在はまだ正確な統計をなす術がない。
⑲	戴雄 2004年	日本「専門家」330人	367人	830人	のべ310台	88万冊余りの書籍は最終的にきれいすっかりなくなった。
⑳	馬嘶 2005年			830人以上	310台	抗戦中に南京で43ヵ所の図書館が破壊され、貴重文化財の170万冊以上が損失。1ヶ月を費やし、88万冊が日本に持ち去る。
㉑	嚴紹澗 2005年	「特工」と「專業人員」330人	367人	830人		南京では合計80万冊前後の文献を文物資料が略奪された。
㉒	徐雁 2005年	「日方人員」330人	367人	830人	のべ310台	図書整理委員会・中支占領地区図書文献接收委員会・中支図書標本整理事務所などが整理。略奪総数は8907万冊余り。
㉓	経盛鴻 2005年	具体的な個人名を列挙しながら、各時期ごとの参加者について、「軍特務占領地区図書文献接收委員会報告」(1938年8月31日)に基づいて紹介。				日本への持ち去り説は採用せず、略奪した図書の侵略目的研究への応用や、汪政権への返還を紹介。

(出典) ①～⑱は、拙稿「南京図書大略奪」のまぼろし」(『諸君!』2005年8月号、文藝春秋)169頁、⑲～㉓は各論文の記述より筆者が整理・作成した。

説には、史料的な根拠が著しく欠如し、新聞報道や二次史料の引用・再引用を繰り返すうちに、特に「掠奪」に従事した人員数が、驚異的に増加したのであった。そして、南京という舞台装置が誇張を増幅する効果を生んだ。「大虐殺」の歴史と「図書大略奪」の叙述を重ね合わせることで、何人かの研究者は意図的に誇大な物語を創作し、日本による中国侵略の反文化性、及び野蛮性を、新たに「実証」したのである。一刻も早く、史実から虚構は排除されなければならない。

それゆえに我々は、直近の研究が示す見解の変貌については、注意深く定点観測を進める必要

がある。特に「南京事件」をとりまく学界の主流が、かかる「妄説」を放棄したのであれば、わたくしの意図が半分は達成されるに等しいからだ。巨視的な日中戦争史像は、あくまでも記録を基礎に構築される必要がある。以下、最新の研究成果について、ここで簡単にふれておきたいと思う。

表1は、これまでにわたくしが一つの論点に設定した、南京などにおける図書「掠奪」、及び「掠奪」後の帰趨について、最新の論考における言説を確認したものである。このうち、①から⑱までは既に簡単な分析を済ませてあり、今回の作業において新たに発見した研究は、それ以降のものである。すなわち、以下の諸論著であった。

- ⑱ 戴雄「抗戦時期中国図書損失概況」(『民国档案』総第77期, 2004年8月)
- ⑳ 馬嘶『1937年中国知識界』(北京図書館出版社, 2005年3月)
- ㉑ 嚴紹溥『日本蔵漢籍珍本追踪紀実』(上海古籍出版社, 2005年5月)
- ㉒ 徐雁『中国旧書業百年』(科学出版社, 2005年5月)
- ㉓ 経盛鴻『南京淪落八年史』下冊(社会科学文献出版社, 2005年7月)

2005年が日本の敗戦60周年ということもあり、本年になって出版された研究が大半を占めている。しかし、特に表1における時系列観測に基づいて発言するならば、いくつかの最新成果の中には、明らかに重大な変化を指摘しなければならないだろう。

すなわち、⑱や⑳のような旧態依然とした「研究」が相変わらず存在しているものの、⑱の場合は、中国国内に残存する一次史料によって立論せんという試みには好感が持てる。更に㉒や㉓の如き、客観的分析を志向した実証研究も、中華人民共和国において徐々に定着しつつあると思われる。特に、㉓の経盛鴻による大著においては、入手が困難だと思われる日中両国語による一次史料や日本側二次史料、更に先行研究を積極的に活用し、第三者による検証を可能とするために、しっかりと脚注も付され、その水準は極めて高いと評価されるべきであろう。㉒の著書が、④の時点における内容と大差なく、出典すら明示しない立論がなされている状況と、好対照である。

余談ではあるが、2005年3月18日に訪問した「侵華日軍南京屠殺遭難同胞紀念館」において常設されていた「日本軍による文化財・図書の略奪」という展示コーナーも、同年9月16日に立命館大学の学部学生を引率して再訪した際には、理由は不明であるがきれいに撤去されていた。中国側の、史実に依拠した侵略史研究は、一歩前進したとみなすことができるのではないか。

これと比較した場合、日本側の研究、とりわけ図書館史専門家が本年に公刊した著書は、お粗末な限りである。加藤一夫・河田いこひ・東條文規『日本の植民地図書館——アジアにおける日本近代図書館史——』(社会評論社, 2005年5月)を、ごく簡単に論評したい。

同書は、本文404頁の大部の作であり、副題で示された通り、明治以降の「植民地」たる北海道・樺太・台湾・満州・朝鮮・中国・南方地域の図書館史を概観した作品である。類似した通史が少ないだけに、一見すると貴重な成果という感触をもってしまふかもしれない。しかし、その立論はあまりに杜撰である。脚注すら付されていない。「第6章 植民地中国の図書館」(「あとがき」によれば、この章は「加藤一夫が草稿を作成し、共同で仕上げた」という……348頁)に記された内

容に具体例を求めながら、その特徴を考察してみよう。

本稿及び筆者の一連の研究と直接関わる部分は、第6章の中に位置する「植民地中国での図書接收問題」という節であろう。ここでは、1937年12月以降、上海・南京などにおいて図書接收活動を主導した機関を「占領地区図書文献接收委員会」とするが⁴⁾、これは防衛庁防衛研究所などにおいて閲覧可能な（更に2005年4月以降は、アジア歴史資料センターのホームページでも閲覧が可能となった）、「陸支密大日記」などの一次史料を閲覧していない証左である。一次史料においては、「文献」という一般的名詞は用いられず、「文件」という中国語風の用語によって統一されている。また、「中支那建設資料整備委員会」⁵⁾は、明らかに「中支建設資料整備委員会」の誤記である。さらに「中華民国国立中央図書館の図書」が、いわゆる「大東亜戦争」勃発前の、「昭和16年2月香港（大学……引用者）フンピンシャン図書館から接收」された等々⁶⁾、注意不足に起因する誤りも目に付く。

だが、より本質的な問題は、次のような叙述に所在する。すなわち、

(a) (掠奪した図書をめぐって……引用者) 図書館員は中国国内で保存する事を目標にしていたのに対して、研究者たちは日本への持ち帰り（略奪と言い換えたほうが正確だろう）に傾いていたようだという。実際、中国から日本への資料の移動は、一九三六年以降に頻繁に起こっていたようである（266頁）。

(b) (1941年3月に汪政権に返還された図書をめぐって……引用者) この公的な措置の裏側で、何らかの力によって多くの資料（その中には、接收・整理資料も含まれている）が日本に持ち出された。その実態は記録に残されていないので不明だが、日本軍を背景にしたものと個人的なものがあったのかもしれない（267頁）。

(c) しかし、当時交戦状態にある両国の関係で問題になることはなかった。そのことが明らかになるのは戦後になってからであった。戦時中に帝国図書館にいた岡田温は、一九四二年、四三年以降、戦地から文部省経由で「接收図書」が続々と送られてきたと戦後になってから回想している（267頁）。

といった部分に、わたくしは注目したい。ゴチック太字は、引用者によるものである。

論点(a)、及び論点(b)ともに、日本による掠奪と持ち去りを言い切り、しかもそれらが「支那事変」勃発前の1936年から「頻繁に起こっていた」とは、全く新しい見解だ。しかしながら、その実態が「不明」であるとは、詭弁以外の何者でもない。

さらに論点(c)に明示される通り、加藤一夫らの認識によれば、「支那事変」下の日中両国は「交戦状態」であったが故、掠奪が「問題になることはなかった」とされる。だが日本側においては、「建前」としての和平を演出するがために、少なくとも「事変」期においてはあからさまな「掠奪」が敬遠され、さらに汪政権への返還劇まで準備されたのである。(c)において岡田温によって回想される「接收図書」とは、「大東亜戦争」宣戦布告以降、「敵国」たる英国の植民地・香港に疎開していた中華民国諸機関・個人が所有する図書、あるいは南方において押収された「敵産」が、太宗を占めていたのであった。要するに、アジア太平洋戦争における「支那事変」と「大東亜戦争」という段階性を全く無視しているのみならず、侵略行為をおこなう権力は、本質が露見しないように様々な口実を設け、さらに「遵法性」を主張するといった、現在にもつながる構造的現象を、加藤ら「進歩派」は見落としていたのである。

侵略戦争の実態を解明するために、単純な加害侵略の事例発掘と羅列を行うといった安易な方法は、わが国においても速やかに自己批判されなければならないと思料する。なお、第6章の末尾には、「歴史的経験を単純化するだけでは問題の解決にならない」として、わたくしがこの間に批判し続けた上海・復旦大学教授の趙建民が日本国内のホームページに掲載した「図書略奪の悪辣な意図」というメッセージを紹介する。但し、その「引用」ですら、実際の記述とは微妙にズレがあり、それにつけても加藤らの「歴史研究」に対する姿勢には、大いなる不信感を抱いてしまうのであった。⁷⁾

3. 「新方志」に描かれた戦時中国の図書

前節において鳥瞰したような最近の動向を意識しながら「新方志」を解読する際、事前に指摘すべきは、ほとんどの「新方志」においては、重要な論点や歴史的出来事に対して、注記して出典を明示するという作業が行われていない点である。完成度には相当なばらつきがあり、一連のシリーズにおける叙述＝「記録」を、均質に扱うことは危険であろう。しかし、各市県において修史事業に従事した人々の「記憶」の所在を知るためにも、無視して看過すべきような素材ではない。よって本節においては、表2において整理した「新方志」ごとの叙述を紹介・検討する方法を通じて、1980年代以降における流れを鳥瞰しておきたい。

表2を一瞥して、まず気がつく点は、特に文化的先進地域でもあった江南を中心に、抗日戦争（日中戦争）をなんらかの原因として建造物や蔵書に被害を被った図書館の数が、非常に多いということであろう。上海や南京などの大都市における図書館の命運については、後述する通り、最近では地域ごとの「図書館史」も編纂されているが、中小都市における戦時中の動向については、恐らくは目下、この情報を大幅に上回る素材を発掘する営為は、相当の困難をともなうものと思われる。

そして第二に、各地において「民衆教育館」や「農民教育館」などと呼ばれる、地域に根ざした「読書室」的施設のかなりの部分が、破壊されたりあるいは閉鎖に追い込まれているという事実にも、気を配らねばならぬ。具体的な蔵書数が判明する図書館は少ない。しかし、例えば阜寧県の場合、その蔵書構成が「万有文庫」シリーズ（商務印書館において出版された、「岩波文庫」や「岩波新書」、また「改造文庫」に類似した内容）や雑誌・小説・児童書といったありきたりの内容かも知れないが、江北の「僻地」において、児童・生徒を含む人々が、「文化」を実体験できる数少ない「場」であったことは、想像するに難くないだろう。

ここでは、詳細を表2に語らせることにして、これ以上の論及はしない。さらに、表2における記述内容について、幾つかの類型にわたる作業を行ってみた。

類型Aには、「日本による持ち去り」を明記したものを設定したが、上海・黄浦区の亞洲文会図書館の一例に留まった。しかもこれは、いわゆる「大東亜戦争」勃発後、租界内の「敵産」を接収する作業の一環として行われた行為であり、決して「支那事变」段階における暴挙ではなかった点を、再三強調しておく必要があるだろう。

しかし、類型Bとしてあげた、日本軍の攻撃などに起因する蔵書の散失あるいは図書館の破壊

表2 「新方志」における戦時下の図書

地域	書名 (刊行年)	記 述 内 容	類型	
上	①徐匯区志 (1997)	上海国際図書館が1937年に北平へ移転 [p. 800]	C	
	②静安区志 (1996)	記述なし [pp. 931-933]		
	③盧湾区志 (1998)	記述なし [pp. 742-744]		
	④楊浦区志 (1995)	五角場の上海市図書館は1937年の抗戦後閉鎖 [p. 832]		
	⑤虹口区志 (1999)	記述なし [pp. 1041-1042]		
	⑥黄浦区志 (1996)	亜洲文会図書館は、日本軍の租界占領後に半数の図書が日本に運び去られ、戦後に返還。量才流通図書館は抗戦勃発後に開放停止。益友図書館は日本の租界占領後に活動縮小 [pp. 1235-1236]		A・C
	⑦閘北区志 (1998)	1932年1月29日～30日の日本軍による爆撃で炎上した東方図書館の再建活動が、抗戦勃発で停止 [pp. 1248-1251]		C
	⑧長寧区志 (1999)	記述なし [pp. 975-977]		
	⑨南市区志 (1997)	記述なし [pp. 867-868]		
	⑩呉淞区志 (1996)	民集簡易図書館が1937年に破壊された [p. 401]		B
	⑪閔行区志 (1996)	記述なし [p. 471]		
	⑫宝山区志 (1992)	1932年の第一次上海事変で商務印書館涵芬楼が破壊され、民衆教育館図書部は1932年と1937年の2度の戦闘で大部分の蔵書を失なう [p. 892]		B
海	⑬嘉定県志 (1992)	南翔の昌明文社は第一次上海事変で破壊され、嘉定県教育図書館は抗戦勃発後に活動停止 [p. 836]	B・C	
	⑭上海県志 (1993)	記述なし [p. 946]		
	⑮川沙県志 (1990)	浦東中学図書室が、1937年に日本軍に破壊された [p. 792]	B	
	⑯金山県志 (1990)	張堰鎮図書館は抗戦中に活動を停止し、朱涇私立図書館は日本軍によって破壊、張堰鎮の閑閑山荘の蔵書30数万巻は日本軍により焼失・掠奪 [pp. 802-803]	B・C	
	⑰南匯県志 (1992)	県立図書館の蔵書8000冊が、日本軍占領時に散失 [p. 539]	B	
	⑱青浦県志 (1990)	青浦第一図書館の蔵書がほとんど散失 [p. 656]	B	
	⑲松江県志 (1991)	松江県図書館の蔵書・版本が焼失 [p. 804]	B	
	⑳奉賢県志 (1987)	記述なし [p. 804]		
	㉑崇明県志 (1989)	1938年の占領後に私立第一図書館は活動を停止し、1939年10月に崇明区公署民衆学校で部分的に開放したが、この間の散失図書も多い [p. 678]	B・C	
	江 南	㉒蘇州市志 (1995)	省立蘇州図書館は日本軍に占領され、県立図書館は攻撃を受け4.6万冊の蔵書の8～9割を失なう [p. 849]。省立図書館の損失は、図書2038種の1.28万冊、新聞や雑誌は全て失ない、古籍は疎開のため無事 [p. 851]	B・D
㉓呉 県 志 (1994)		蘇州図書館は日本に占領され、県立図書館は日本軍に破壊された [pp. 952-953] …蘇州市志と重複	B	
㉔太倉県志 (1991)		第一民衆教育館の建物が焼失し解散 [p. 726]、1939年2月に復館し、県立図書館の蔵書は2.1万冊 [p. 728]	B	
㉕崑山県志 (1990)		民衆教育館は占領中も引き続き活動させられた [p. 668]	C	
㉖常熟市志 (1990)		県図書館は業務停止 [p. 774]		
㉗沙洲県志 (1992)		1937年11月に占領された後、民衆教育館と農民教育館は活動停止 [p. 752]		
㉘呉江県志 (1994)		1937年末の占領後、盛澤・同里・城区の民衆教育館は活動を継続したが [p. 670]、县城と盛澤の図書館は閉鎖 [p. 673]	C	
㉙無錫市志 (1995)		抗戦勃発後、無錫県立図書館は善本・沙本・稿本や地方文献を疎開させて、難を避けた [p. 2675]	D	
㉚無錫県志 (1994)		重要な書籍は保全した [p. 861] …無錫市志と重複	D	
㉛江陰市志 (1992)		南菁学校の凝暉楼の蔵書4万冊余りと木刻原版などは日本軍によって全て破壊され、市図書館は日本軍により占拠、郵便局に代用され、蔵書5万冊あまりは散失した [pp. 1055-1056]	B・C	
㉜宜興県志 (1990)		県民衆図書館は抗戦勃発後に閉鎖され、私立の文武図書館と周鉄図書館も活動停止 [pp. 665-666]	C	
㉝常州市志 (1995)		記述なし [pp. 473-474]		

江	③④武進県志 (1988)	県立図書館は抗戦中に閉鎖され、蔵書も散失 [p. 694]	B・C		
	③⑤金壇県志 (1993)	記述なし [p. 670]			
	③⑥溧陽県志 (1992)	民衆教育館書報閲覧室は閉鎖され、県民衆図書館の設備は破壊された [p. 773]	B・C		
	③⑦鎮江市志 (1993)	省立鎮江図書館は日本軍の宿舎とされ、大後方に疎開させた善本以外の多くが散失、五三図書館も活動停止。さらに伝経楼・游経楼・私立江蘇流通図書館などの蔵書楼の被害も大きい。また、紹宗国学蔵書楼の善本類も失われた [pp. 1294-1296]	B・C・D		
	③⑧丹徒県志 (1993)	3ヶ所の公立図書館、1ヶ所の市立図書館、2ヶ所の個人蔵書楼のうち、わずかに省立鎮江図書館だけが残存した [p. 750] …鎮江市志と重複	B		
	③⑨句容県志 (1994)	民衆教育館及びその附設図書館が解体 [pp. 650-652]	C		
	④⑩丹陽県志 (1992)	相伯図書館の建物・蔵書1.5万冊余りが日本軍により破壊され、『馬相伯出使高麗日記』や康有為未刊著作なども失なう [p. 772]	B		
	南	④①揚中県志 (1991)	県図書館の蔵書3000冊余りが散失 [p. 480]	B	
		④②高淳県志 (1988)	記述なし [p. 634]		
		④③溧水県志 (1990)	県城陥落後、図書館は活動停止、蔵書も散失 [p. 544]	B・C	
④④江寧県志 (1989)		湖熟実験民衆教育館は、南京占領前後に活動停止 [p. 734]	C		
④⑤江浦県志 (1995)		記述なし [p. 616]			
④⑥六合県志 (1991)		記述なし [p. 581]			
江	北	④⑦南通県志 (1996)	1938年春の南通占領とともに、南通図書館一帯は日本軍の宿営地とされた。さらに各郷鎮の図書室や蔵書楼なども活動を停止、図書は大部分が散失した [pp. 1002-1003]	B・C	
		④⑧如皋県志 (1995)	県立図書館は、1938年に活動停止 [p. 676]	C	
		④⑨啓東県志 (1993)	記述なし [pp. 819-821]		
		④⑩海門県志 (1996)	記述なし [p. 761]		
		④⑪海安県志 (1997)	記述なし [p. 808]		
		④⑫揚州市志 (1997)	抗戦初期、晨鳴社図書館はさかんに抗日宣伝を実施、また蔵書家・劉梅先の上海での蔵書2万冊焼失 [pp. 2668-2669]		
		④⑬江都県志 (1996)	記述なし [pp. 855-856]		
		④⑭泰興県志 (1993)	県立初級中学内の民衆教育館蔵書室の図書は、日本軍によって焼き払われた [p. 799]	B	
		④⑮高郵県志 (1990)	記述なし [p. 588]		
	南	④⑯泰 県 志 (1993)	記述なし [p. 728]		
		④⑰儀徵市志 (1994)	民衆教育館図書閲覧室は、日本占領後に活動を停止し、図書も散失した [p. 588]	B・C	
		④⑱泰 州 志 (1998)	泰県図書館の蔵書5万冊の3～4割が散失 [p. 665]	B	
		④⑲邗江県志 (1995)	記述なし [p. 690]		
		④⑳興化市志 (1995)	1941年に県城陥落後、民衆教育館と審言図書館は閉鎖され、前者の蔵書は散失 [p. 637]	B・C	
		北	④㉑靖江県志 (1992)	蔵書2万冊余りの私立靖江図書館は、1937年に日本軍機に空襲されて破壊 [p. 671]	B
			④㉒塩城県志 (1993)	記述なし [pp. 620-622]	
			④㉓東台市志 (1994)	県立図書館は、1938年の日本軍入城後活動停止 [p. 818]	C
			④㉔响水県志 (1996)	記述なし [pp. 637-638]	
			④㉕建湖県志 (1994)	記述なし [p. 697]	
④㉖大豊県志 (1989)	記述なし [p. 688]				
④㉗阜寧県志 (1992)	『万有文庫』、雑誌、小説、児童書を有する公共図書館が、抗日戦争中に破壊された [p. 383]		B		
④㉘連雲港市志 (2000)	日本軍の新浦・板浦・海州一帯への空襲などで、図書の損失は計り知れず、清代の学者である許喬林・許桂林の蔵書楼も破壊された [p. 2350]		B		
④㉙灌雲県志 (1999)	記述なし [p. 794]				
④㉚贛榆県志 (1997)	記述なし [p. 884]				
④㉛東海県志 (1994)	記述なし [p. 697]				

江	⑦② 淮陰市志 (1995)	中山図書館は日本軍により1939年2月に焼き払われ、省立清江民衆教育館は1937年に閉鎖 [p. 1899]。また個人蔵書たる百科万卷草堂も、日本占領時に散失 [p. 1903]	B・C
	⑦③ 肝胎県志 (1993)	蔵書3400冊の県図書館は1938年1月の日本占領時に破壊され、民衆教育館図書室も活動停止 [p. 669]	B・C
	⑦④ 漣水県志 (1997)	記述なし [p. 812]	
	⑦⑤ 宿遷市志 (1996)	民衆教育館の図書・雑誌類は、日本占領時にすべて散失した [p. 817]。また、華堂図書館と瑞璇図書館は、1938年11月22日の空襲で大破された [p. 818]	B
	⑦⑥ 洪澤県志 (1999)	仁和民衆教育館・蔣坝民衆教育館は、抗日戦争期に日本軍によって破壊される [p. 718]	B
	⑦⑦ 淮安市志 (1998)	記述なし [pp. 622-624]	
	⑦⑧ 金湖県志 (1994)	記述なし [pp. 544-545]	
	⑦⑨ 泗陽県志 (1995)	県立初級中学の蔵書1000冊余りが日本軍に焼かれる [p. 707]	B
	⑧① 灌南県志 (1995)	記述なし [p. 656]	
	北	⑧① 徐州市志 (1994)	銅山県図書館は、日本侵攻前に図書を埋蔵・移転などしたが、前者のほとんどが湿気のため破損 [p. 1970]
⑧② 銅山県志 (1993)		銅山県民衆教育館は抗戦後に日本により破壊されて活動を停止 [p. 759]、県図書館は抗戦時にいったんは閉鎖され、貴重図書を地中に埋蔵するも、全てが破損してしまった [p. 760] …徐州市志と重複	B・C ・D
⑧③ 豊 県 志 (1994)		記述なし [pp. 747-748]	
⑧④ 睢寧県志 (1994)		「中師校」にある蔵書約1万冊の図書館が閉鎖 [p. 558]	C
⑧⑤ 邳 県 志 (1995)		蔵書数2万冊余りの官湖図書館の図書が、陥落期にすべて散失した [p. 608]	B

1. 「類型」Aは、日本側による持ち去りを明記したものの。
 2. 「類型」Bは、抗戦期になんらかの原因で蔵書が散失、あるいは破壊されたものの。
 3. 「類型」Cは、抗戦期に活動を停止したものの。
 4. 「類型」Dは、蔵書を保全したものの。
- 註4、「記述なし」の場合でも、該当するページを記してある。
出典 引用「新方志」一覧表にまとめた文献の記述を、筆者が整理した。

などは、江南・江北を問わず各地で確認され、類型Cにおける活動停止や閉鎖に追い込まれた事例も多い。なお、表2はあくまでも、「新方志」中の記述を整理してまとめた域を超えてはおらず、常識的に考えると、類型Bの如く図書を失った施設においては、必然的に類型Cの閉鎖に追い込まれるという道筋が、極めて自然だと判断される。したがって、表2において類型Bのみが記されている場合も、ほぼ類型Cを伴っていると考えて良いだろう。

国立中央図書館など、国家的規模の図書館における疎開の実施は、たいへんに良く知られている⁸⁾。しかし今回の作業を通じて、類型Dにみられる通り、地方図書館における蔵書保全の努力が行われていた事も明らかになった。無錫の場合は成功しているものの、徐州(銅山県)においては、埋蔵した図書のほとんどが、湿気乃至は防水不良のために破損したという。

歴史の細部を思い浮かべた際、平時が継続したならば生き長らえたであろう幾多の図書たちが、無言のままにこの世から姿を消していったという現実、我々に深く重い課題を投げかけているのではないだろうか。

4. むすびにかえて

その課題とは何であるか？ わたくしはここに、実証史学の前提たる「文献による考証」とい

った方法論の陥穽が存在すると考えている。無論、さまざまな手段を講じて、国内外各地の史料を発掘し、新しい事実を解明することは、歴史家に課せられた大きな使命であり、筆者もこれまで、微力ながらもかかる道を歩みつづけている。しかし既述の通り、「新方志」のほとんど全ては、1980年代以降になってから編纂されたものであり、しかも各々の記述に対する出典の明示などはおこなっていないため、そこに書かれた内容について、厳密に「検証」することは極めて困難である。

また、特に個人蔵書（著名な蔵書楼などは除いて）の場合、残存する記録は、地域の図書館などと比較しても、遙かに少ない⁹⁾。こんにち多く用いられる個人所有図書の戦時中における損失のデータなどは、大半が戦後になってからの「自己申告」に依拠しているという曖昧さも、どうしても拭い去ることはできない¹⁰⁾。

かといって、「証拠不足」を理由にして、これらの「歴史」を切り捨てることだけは、厳に慎まなければならないだろう。何故ならば、人間には想像力が備わっているからだ。日本における事例だけで考えても、関東大震災や阪神淡路大震災で、あるいは各地の空襲や沖縄の地上戦において、図書たちの運命がいかなるものであったのかを想起すれば、「戦時中国」における良く似た現象の中でのイメージは得られる。さらに、「実証」し得た「部分」から、「全体」を類推・推計するといった方法も、ある程度は有効であると考ええる。

さらに今回の作業を通じて、筆者は大切な発見をした。それはすなわち、従来からわたくしが批判し続けていたような、日本による「計画的」かつ「大量」の「図書掠奪」説を積極的に支持するような言説は、「新方志」において、さらにその舞台とされた「南京」や「上海」の「図書館史」においても、全く登場していないのである¹¹⁾。地域において、現場において、歴史を伝える仕事に従事する人々の草の根的な良心によって、「記憶」と「記録」が絶妙に架橋されているのではないだろうか。とすれば、かの「掠奪説」は、現地をあまり見つめずに生活する「学者」が、机上で夢想したフィクションに過ぎなかったのである。

近年の流行語とも呼べる「感情の記憶」として歴史を尊重したいのであれば、反語的ではあるがやはり、精一杯「記録」の裏付けを確保する必要があるだろう。無論、この作業は一個人で完結的に実施できるものではない。また、一国単位でも恐らく不可能だろう。日本と中国、台湾・香港など、各地の研究者たちによる労多き地味な仕事が一定程度まで蓄積して、相互に影響を及ぼすような関係性が構築されれば、「記憶」と「記録」は、そこで自ずと調和するのではなからうか。その日が遠からんことを、切実に祈念する。

(了)

附 引用「新方志」一覧表

1. 徐匯区志編纂委員会編『徐匯区志』（上海社会科学院出版社，1997年）
2. 静安区区地方志編纂委員会編『静安区志』（上海社会科学院出版社，1996年）
3. 上海市盧湾区志編纂委員会編『盧湾区志』（上海社会科学院出版社，1998年）
4. 上海市楊浦区志編纂委員会編『楊浦区志』（上海社会科学院出版社，1995年）

5. 虹口区志編纂委員会編『虹口区志』（上海社会科学院出版社，1999年）
6. 上海市黄浦区志編纂委員会編『黄浦区志』（上海社会科学院出版社，1996年）
7. 上海市闸北区志編纂委員会編『闸北区志』（上海社会科学院出版社，1998年）
8. 長寧区志編纂委員会編『長寧区志』（上海社会科学院出版社，1999年）
9. 上海市南市区志編纂委員会編『南市区志』（上海社会科学院出版社，1997年）
10. 上海市宝山区史志編纂委員会編『吳淞区志』（上海社会科学院出版社，1996年）
11. 上海市閔行区志編纂委員会編『閔行区志』（上海社会科学院出版社，1996年）
12. 上海市宝山区地方志編纂委員会編『宝山区志』（上海人民出版社，1992年）
13. 上海市嘉定県志編纂委員会編『嘉定県志』（上海人民出版社，1992年）
14. 上海県志編纂委員会編『上海県志』（上海人民出版社，1993年）
15. 上海市川沙県志編纂委員会編『川沙県志』（上海人民出版社，1990年）
16. 上海市金山県志編纂委員会編『金山県志』（上海人民出版社，1990年）
17. 上海市南匯県志編纂委員会編『南匯県志』（上海人民出版社，1992年）
18. 上海市青浦県志編纂委員会編『青浦県志』（上海人民出版社，1990年）
19. 上海市松江県地方史志編纂委員会編『松江県志』（上海人民出版社，1991年）
20. 上海市奉賢県志修編委員会編『奉賢県志』（上海人民出版社，1987年）
21. 上海市崇明県志編纂委員会編『崇明県志』（上海人民出版社，1989年）
22. 蘇州市地方志編纂委員会編『蘇州市志』第3冊（江蘇人民出版社，1995年）
23. 吳県地方志編纂委員会編『吳県志』（上海古籍出版社，1994年）
24. 太倉県志編纂委員会編『太倉県志』（江蘇人民出版社，1991年）
25. 昆山市地方志編纂委員会編『昆山県志』（上海人民出版社，1990年）
26. 常熟市地方志編纂委員会編『常熟市志』（上海人民出版社，1990年）
27. 張家港市地方志編纂委員会辦公室編『沙洲県志』（江蘇人民出版社，1992年）
28. 吳江市地方志編纂委員会編『吳江県志』（江蘇科学技術出版社，1994年）
29. 無錫市地方志編纂委員会編『無錫市志』第4冊（江蘇人民出版社，1995年）
30. 無錫県志編纂委員会編『無錫県志』（上海社会科学院出版社，1994年）
31. 江陰市地方志編纂委員会編『江陰県志』（上海人民出版社，1992年）
32. 江蘇省宜兴市地方志編纂委員会編『宜兴県志』（上海人民出版社，1990年）
33. 常州市地方志編纂委員会編『常州市志』第3冊（中国社会科学出版社，1995年）
34. 江蘇省武進県志編纂委員会編『武進県志』（上海人民出版社，1988年）
35. 金壇県地方志編纂委員会編『金壇県志』（江蘇人民出版社，1993年）
36. 溧陽県志編纂委員会編『溧陽県志』（江蘇人民出版社，1992年）
37. 鎮江市地方志編纂委員会編『鎮江市志』下冊（上海社会科学院出版社，1993年）
38. 丹徒県地方志編纂委員会編『丹徒県志』（江蘇科学技術出版社，1993年）
39. 句容県地方志編纂委員会編『句容県志』（江蘇人民出版社，1994年）
40. 丹陽市地方志編纂委員会編『丹陽県志』（江蘇人民出版社，1992年）
41. 揚中県地方志編纂委員会編『揚中県志』（文物出版社，1991年）
42. 高淳県地方志編纂委員会編『高淳県志』（江蘇古籍出版社，1988年）

43. 溧水県編修県志委員会編『溧水県志』（江蘇人民出版社，1990年）
44. 江寧県地方志編纂委員会編『江寧県志』（档案出版社，1989年）
45. 江浦県地方志編纂委員会編『江浦県志』（河海大学出版社，1995年）
46. 六合県志編纂委員会編『六合県志』（中華書局，1991年）
47. 南通市地方志編纂委員会編『南通県志』（江蘇人民出版社，1996年）
48. 江蘇省如臯市地方志編纂委員会編『如臯県志』（香港新亜文化基金会，1995年）
49. 啓東県志編纂委員会編『啓東県志』（中華書局，1993年）
50. 海門市地方志編纂委員会編『海門県志』（江蘇科学技術出版社，1996年）
51. 海安県志編纂委員会編『海安県志』（上海社会科学院出版社，1997年）
52. 江蘇省揚州市地方志編纂委員会編『揚州市志』下冊（中国大百科全书出版社，1997年）
53. 江都市地方志編纂委員会編『江都県志』（江蘇人民出版社，1996年）
54. 泰興県志編纂委員会編『泰興県志』（江蘇人民出版社，1993年）
55. 高郵県編史修志領導小組編『高郵県志』（江蘇人民出版社，1990年）
56. 泰県志編纂委員会編『泰県志』（江蘇古籍出版社，1993年）
57. 儀徴市市志編纂委員会編『儀徴市志』（江蘇科学技術出版社，1994年）
58. 泰州市地方志編纂委員会編『泰州志』（江蘇古籍出版社，1998年）
59. 邗江県地方志編纂委員会編『邗江県志』（江蘇人民出版社，1995年）
60. 興化市地方志編纂委員会編『興化市志』（上海社会科学院出版社，1995年）
61. 靖江県志編纂辦公室編『靖江県志』（江蘇人民出版社，1992年）
62. 塩城市郊区地方志編纂委員会編『塩城県志』（江蘇人民出版社，1993年）
63. 東台市地方史編纂委員会編『東台市志』（江蘇科学技術出版社，1994年）
64. 响水県地方志編纂委員会編『响水県志』（江蘇古籍出版社，1996年）
65. 建湖県地方志編纂委員会編『建湖県志』（江蘇人民出版社，1994年）
66. 大豊県編修県志委員会編『大豊県志』（江蘇人民出版社，1989年）
67. 阜寧県志編纂委員会編『阜寧県志』（江蘇科学技術出版社，1992年）
68. 江蘇省連雲港市地方志編纂委員会編『連雲港市志』下冊（方志出版社，2000年）
69. 江蘇省灌雲県地方志編纂委員会編『灌雲県志』（方志出版社，1999年）
70. 贛榆県志編纂委員会編『贛榆県志』（中華書局，1997年）
71. 東海県地方志編纂委員会編『東海県志』（中華書局，1994年）
72. 淮陰市地方志編纂委員会編『淮陰市志』下冊（上海社会科学院出版社，1995年）
73. 盱眙県志編纂委員会編『盱眙県志』（江蘇科学技術出版社，1993年）
74. 漣水県地方志編纂委員会編『漣水県志』（江蘇古籍出版社，1997年）
75. 宿遷市地方志編纂委員会編『宿遷市志』（江蘇人民出版社，1996年）
76. 洪澤県志編纂委員会編『洪澤県志』（中国大百科全书出版社，1999年）
77. 淮安市地方志編纂委員会編『淮安市志』（江蘇人民出版社，1998年）
78. 金湖県志編纂委員会編『金湖県志』（江蘇人民出版社，1994年）
79. 泗陽県志編纂委員会編『泗陽県志』（江蘇人民出版社，1995年）
80. 灌南県地方志編纂委員会編『灌南県志』（江蘇古籍出版社，1995年）

81. 徐州志地方志編纂委員会編『徐州市志』下冊 (中華書局, 1994年)
82. 江蘇省銅山県志編纂委員会編『銅山県志』 (中国社会科学出版社, 1993年)
83. 江蘇省豊県志編纂委員会編『豊県志』 (中国社会科学出版社, 1994年)
84. 睢寧県地方志編纂委員会編『睢寧県志』 (中国社会科学出版社, 1994年)
85. 邳県志編纂委員会編『邳県志』 (中華書局, 1995年)

註

1) (h)の論文では、(e)と(g)を中心とした既発表の内容に加えて、2004年夏、及び2005年3月後半、中華人民共和国北京市・上海市・南京市において新たに入手した一次史料・二次史料を用いた分析を行った。内容的に筆者は、従来の論文との差を自覚していないが、「見出しが誤読を誘導する」、あるいは「南京大虐殺事件否定論と読まれる」といった批判に加え、『諸君!』という民族派・右派の媒体に拙論を公表したこと自体に対する厳しい糾弾を受けた。

確かに、同誌において掲載される中国論の多くは、感情的かつ非科学的な内容が多く見られ、わたくし自身の研究がこれに連なるという危惧には、首肯すべき点もある。しかし、現代日本におけるいわゆる「左派的」言説が、眼に見えて衰退しているいま、旧来からの「縄張り」に拘泥した言論活動のみによっては、差し迫る窮状を克服することは困難であると思う。事実、1980年代以降の「歴史科学運動」は、まさに「連戦連敗」の実績を示しているではないか。

更に広く社会に眼を転じて、様々な左翼運動を主導した人々の一部は、世代交代あるいは既得権益の受益者に転化したことに起因して、今や各界で「改革」を主導する側に廻っている。これは個としての「成長」なのか、はたまた階級的「裏切り」なのか? 明確なる解答は、幾世代かのちにならないと判明しないだろう。いずれにせよ我々の世代は、平和と民主主義を守るための、全く新しい闘争戦略を追究せねばならぬのだ。

2) 「新方志」の近現代史研究における意義については、さしあたり高橋孝助「中国地方史を利用して卒業論文を書く」(歴史科学協議会編『卒業論文を書く——テーマ設定と史料の扱い方』山川出版社, 1997年)における議論を参照されたい。

3) 経盛鴻は南京師範大学歴史系教授で、中華民国史を専攻。2001年10月に台北において開催された国際会議で報告した拙稿「戦時日方略奪図書問題述評」(辛亥革命九十週年国際学術討論会論文, 台北, 2001年)に関する意見交換を、2005年3月に行うことができた。率直な印象として、戦争問題について「冷静」に「議論」することができる、中国側の良きパートナーの登場であるという感慨を得た。

4) 加藤一夫・河田いこひ・東条文規『日本の植民地図書館——アジアにおける日本近代図書館史——』(社会評論社, 2005年) 263頁。

5) 加藤一夫など同上書, 265頁。

6) 加藤一夫など同上書, 268頁。

7) 趙建民による文章が掲載されていたホームページは、2005年夏以降すでに Web 上に存在していない (<http://www.bekoame.ne.jp/~ymasaki/tosho.htm>)。加藤一夫など同上書272~273頁が不正確な引用をしているため、ここに本来の記述を復元して紹介しておきたい。日本語として不自然・不正確な部分も、原典のママとしてある。

「図書略奪の悪辣な意図」

図書・文化財は中国の長い歴史や文化的繁栄を象徴し体現するものである。日本の侵略軍の南京大虐殺の際の図書略奪は、一般的な戦争の際の文化財破壊とは絶対に同じものではなく、かつ、その中には悪辣な意図があった。

短い期間で言えば、日本が中国で軍事活動や経済的略奪を行い、植民地統治を確立するためであり、また「大東亜共栄圏」を勝手に計画し実現するための一つの重要な措置でもあったのである。日本は

中国から略奪した図書を使って東亜研究所、東洋文化研究所、東亜経済研究所、東亜風土病研究所、大東亜図書館、民族研究所などの機関を設立した。彼らは中国から略奪した図書を、対外戦争と植民地統治のために大量に使ったのである。

長い目で見れば、日本軍による図書略奪は我々の中国文化を破壊し、我々中国民族を亡きものにしようとするものであった。日本の侵略者の戦争中の図書略奪は「その目的は中国文化を徹底的に消滅させ、それによって大陸征服をしようという迷夢に他ならない」とは、まさに学者が指摘するところである。

それゆえに、図書を略奪することと、民族を虐殺することは、日本の侵略政策とその行動の完全に一致し相補いあう両面なのである。日本には「日本の行っている戦争は進歩のための文化戦争である」と懸命に唱え、日本軍の中国侵略戦争中の図書略奪を「世界の戦争史上例のない、皇軍の文化擁護である」と褒め称えるものもいた。図書略奪が日本の侵略軍隊の視野の中で重要な位置を占めていたことは容易に読み取れるのである。

以上、以下のことが十分に明かにできる。すなわち、中国を侵略した日本軍の南京大虐殺の際の図書略奪は、日本の軍国主義者の他人を傷つけて己を利し、他の国を滅ぼして自分を強くするという目論見、それによって世界に覇を唱え侵略しようとした野心とその本質をさらけ出しているのである。日本の侵略軍が行った残酷な虐殺と図書・文化財に対する野放図な略奪は、日本の対外侵略目的の二つの側面をなしている。それゆえ、学術にたずさわる人々に、日本軍の中国図書・文化財の略奪問題をさらに研究して、それによって日本の対外侵略の悪辣な活動を明かにし、批判することに精力を傾けるよう呼びかけることがぜひ必要なのである。

趙建民(復旦大学歴史系教授、同大学附属日本研究センター研究員)

- 8) 国立中央図書館の図書疎開に関しては、章以鼎主編『国立中央図書館六十年大事記(初稿)』(台北:国立中央図書館, 1993年)など、数多くの詳細な記録が公刊されている。
- 9) 蔵書楼についてはあまたの研究が存在するものの、戦時期を専門的に分析した成果は少ない。日本においては、神戸輝夫「日中戦争における文化侵略」(1)、『大分大学教育福祉科学部紀要』第22巻第2号, 2000年)が、中国側の近年の研究を簡単に紹介している。
- 10) 'General Estimate of China's Cultural Losses in Wartime', 「中国被日劫掠文物目録」(中央研究院近代史研究所档案館所蔵「日賠会档案」32-00.787), あるいはこれを邦訳したと判断される「中華民國よりの略奪文化財総目録」(同上, 32-00.766)などは、いずれも戦後段階に形成された史料である。
- 11) 朱慶祚主編『上海図書館事業志』(上海社会科学院出版社, 1996年), 《上海百年文化史》編纂委員会編『上海百年文化史』第2巻下冊(上海科学技術文献出版社, 2002年), 《南京図書館志》编写組編『南京図書館志(1907-1995)』(南京出版社, 1996年), 徐耀新主編『南京文化志』下冊(中国書籍出版社, 2003年)など、事実関係の淡々とした叙述が続き、極めて史料価値が高い、好感が持てる工具書であると思う。中国における研究展開の可能性も、これらに示されているのではなかろうか。

[附記] 本稿にかかわる研究の大半は、筆者が大分県別府市の立命館アジア太平洋大学出向中にまとめたものである。出向期間中、坂本和一学長からは研究遂行に対するご高配を賜った。ここに記して感謝を申し上げたい。

また、今回の論文が依拠した「新方志」の大部分は、中央研究院近代史研究所郭廷以図書館、及び早稲田大学中央図書館において閲覧したものである。ふたつの図書館の関係各位による便宜提供に対しても、ここでお礼を申し上げたいと思う。